

中学校国語科における ICT 活用（動画制作）の試み

— 単元「ことばは生きている」 —

植田恭子（大阪市立昭和中学校）・豊田充崇（和歌山大学）

大和誠子（ベネッセコーポレーション）

概要： 中学校国語科において「生きて働くことばの力」「情報活用能力」の育成を目指し、3年間のカリキュラム、ループリックをもとに学習を展開している。なかでも学習者が、タブレット端末をツールとして活用し、思いや考えを表現するなどの表現活動において ICT の活用を進めている。本発表では、文化庁のサイトの動画を活用し、グループで動画作成に挑んだ単元「ことばは生きている」について報告する。

キーワード： 情報活用能力， タブレット端末， ICT 活用

1 はじめに

次期学習指導要領では、学習の基盤となる資質・能力として言語能力や問題発見・解決能力とともに「情報活用能力」が位置づけられている。言葉を学習対象とし、言葉を仲立ちとして情報を扱っている国語科において、田近洵一(1998)の指摘にあるように、情報活用能力は、国語学力の中核に位置づけられるものであると考える。中学校国語科において、新聞をはじめ多様な情報を学習材として活用し、3年間のカリキュラム(表1)、ループリック(表2)を作成し、それをもとに実践を重ねてきた。本発表では、タブレット端末を活用した単元「ことばは生きている」を通して、「深い学び」を実現する国語科の ICT 活用のあり方について考察していきたい。

2 表現活動における ICT 活用

国語科の「生きて働く知識・技能の習得」に ICT を効果的に活用していきたいと考えている。学習者が知識を活用する「場」の設定は重要である。課題に関わりタブレット端末などをツールとして活用し、そこで獲得したものを表現、それに対する思いや考えを交流するなど表現活動において ICT の活用を進めている。

2016年2学期2年生を対象にした単元「こ

とばは生きている」では、文化庁サイトの動画（ことば食堂へようこそ！）を活用した。動画を視聴することによって現実の活用場面がイメージできることが大きい。また、この動画は、表現活動のてびきにもなっている。

成果を表現し、共有するツールとしても ICT は有効である。動画作成は、相手意識をもった、情報の送り手や意見であり、撮影、演技、記録、編集など制作する上で、グループでの連携、協力なくしては活動が成り立たない。それぞれの思いや考えを伝え合いながら、折り合いをつけ妥協点を探りつつ、創作していくなかで、協働的な学びの「場」が生まれる。

相互に振り返る、学びを自己照射するツールとしても活用したい。単元「ことばは生きている」本時（第6時＝資料2参照）の展開のように、自分達の活動や学習の成果、学びのプロセスを振り返り、他の学習者との交流も踏まえて、振り返ることができる。学びを「検証」するツールとしても有用であるといえる。

また、動画は何度も繰り返し視聴することが可能である。作成段階で立ち止まって、振り返り、繰り返し修正ができる。他者の活動を参考にし、その学びをリアルタイムで活かしていくことも可能である。

3 単元「ことばは生きている」の実際

文化庁は、平成7年度から毎年、全国16歳以上の男女を対象に「国語に関する世論調査」を実施している。この調査は、「日本人の国語に関する意識や理解の現状について調査し、国語施策の立案に資するとともに、国民の国語に関する興味・関心を喚起する」という目的で行われている。

調査結果を基にした動画が「ことば食堂へようこそ！」である。「慣用句を本来の意味で理解している人と、新しく生まれた意味で理解している人との間で生じるコミュニケーション上での齟齬を紹介するスキット」は、文化庁公式チャンネルで公開されている。広く社会に向けて発信されているものであるが、「慣用句」の学習のてびきとして有用である。そこで、一般社会を対象としたものを参考にしながら、中学生活におきかえて考え、リライトさせることにした。

ことわざや慣用句の学習について、現行の「学習指導要領」では、小学校3,4年生に指導事項として位置づけられている。「言語生活を豊かにするために、これらの言葉の意味を知り、実際の言語生活で用いるようにさせることが大切である」（学習指導要領解説）と明記されているように、実際の言語生活での活用につなげることが重要である。「中学校学習指導要領解説」では小学校で学んだ「慣用句」に関する知識を一層広げて「話すこと・聞くこと、書くこと、読むことを通して身に付けさせるように指導する」とある。

単元の設定にあたって、言葉に関する知識

量を増やすこととともに、実際に使っていくこと、生活の中での「慣用」について、自分自身の生活体験と重ね合わせ、それを理解させることを学ばせたいと考えた。そのために文化庁の動画をてびきとし、動画作成に取り組む活動を取り入れた。（資料1の単元計画を参照

伝統的言語文化と向き合う場をより身近なものにし、学習材と言語生活を結びつけるために最新のICT機器を活用し、世代間によるギャップがコミュニケーションをとるうえでの壁となることと対峙させようと試みた。また、グループで考えを構築しながら進めていくことで生み出される創造的な学習、主体的・対話的な学びを自覚化させたいと考え、単元「ことばは生きている」を展開した。

4 成果と課題

生活の中での「慣用」について、ICTを活用したことで、生活と結びつけることが可能になり、知識として記憶する従前の学習とは異なり、学習者も意欲的に取り組み、取り上げた以外の慣用句にも興味をもち、『国語便覧』や図書館資料で調べる姿も見られた。また、グループで制作した動画を相互に評価し合うことで（資料2の本時の学習＝第6時を参照）、言語生活を見直すことにもつながったと考えられる。第7時の振り返りでは、SNSの効果的な活用や語彙力を増やす必要性などコミュニケーションのあり方そのものについて向き合い、自分自身の言語生活を見直そうとする記述が多かった。

今後、放送番組の活用なども進めながら、国語科における「情報活用能力」育成の単元学習に取り組んでいきたい。

表1 情報活用能力育成カリキュラム（国語科）

各学期ごとに「情報活用能力」育成のための発展的な単元を「情報活用能力の3観点8要素」と「自立と共生の行為としての自己学習活動」（田近洵一1996）、「NIEカリキュラム試案」（植田1998）をもとに作成した（植田恭子「日本NIE学会誌」2010第5号）プランをICT活用を考慮し、再構成した。

	段階的な読み	1年	2年	3年
1学期	複眼的なものの見方による読み	いろいろなよむこと	コラムを読む	社説を読む
2学期	多様な情報の比較読み	写真を比べる	ひとの情報を読み比べる	メディアを比べる
3学期	情報の送り手になる体験	「俳写」をつくろう	「ひと欄」を作成しよう	「投書」情報発信をしよう

総合単元	世界のこどもたち	いのち	市民のちから
------	----------	-----	--------

表2 情報活用能力 ルーブリック (紙幅の関係で到達レベル4段階については省略)

情報活用能力 段階		「自立と共生の行為としての自己学習行動」 (田近洵一・1996)	項目
1	課題設定 ・「問い」をもつ。	問題を発見し、それを基礎に課題を設定する。 (問題発見・課題設定の能力)	・多様な情報を読む。 ・情報を継続して読む。 ・得た情報を交流する。
2	・見通しをもつ。 ・必要な情報を知る。	課題解決の方法や手順、必要な資料などについて見通しをもつ。 (学習構想・学習計画の能力)	・情報を取り扱う技法(KJ法全角,ブレインストーミング,ランキング,マッピングなど)を使いこなす。
3	情報収集 ・検索の手順を考える。・探す。 ・見つけ出す。・調べる。 ・収集する。・選択する。	ア 情報源(他者)のオリジナリティー(他者の発想・論理の独自性)をとらえる。	・図書館の検索方法を身につける。 ・新聞情報を比較して読む。 ・信頼のおけるWebページの情報を収集する。
		イ 価値ある情報を発見する。また、必要な情報を収集する。 (情報受容・他者理解の能力, 情報収集・情報選択の能力)	・様々な種類の文章から必要な情報を集める読み方を身につける。 ・情報の扱い方(カードや付箋全角,思考ツール,図表など)を用い情報を整理する。
4	・取り出す。・とらえる。 ・関係づける。・思考する。 ・編集する。・再構成する。	個々のデータを関係づけ全角,構造化して,認識を形成(情報を再構成)する。 (関係づけ・構造化の能力)	・収集した多様な情報を共有する。 ・課題解決につながる様々な文章を読み,必要な情報を選び全角,自分の表現に役立てる。
5	・まとめる。・表現する。 ・提示する。・分析する。	情報を批判的に受容し,批評するとともに全角,得た情報を評価する。 (文献批評・情報評価の能力)	・収集した情報の意図や背景を考えながら,真偽を評価,分析する。 ・相手の立場全角,考えを尊重し,目的に沿い,効果的に展開するよう聞き分け全角,自分の考えを深める。
6	情報の発信・伝達 ・伝える。・交流する。・対話する(自己・他者・社会) ・情報手段を選択する。・共有する。	情報を再生産(学習内容を整理)し,発表する。 (情報再生産・自己表現の能力)	・構成を考えて全角,決められた時間内で発表する。 ・相手や目的に応じて全角,文章の内容や表現を変える。 ・目的や方向に沿って建設的に話し合う。
7	振り返る ・評価する。 ・問題点,改善点を見いだす。 ・次の「問い」をもつ。	ア 他者を媒介にして自己を相対化する。	・自己評価,相互評価によって学びのプロセスを振り返る。・思いや考えが伝わったかを検証する。
		イ 自分の情報処理活動のあり方(学習成立過程)を振り返り,自己評価する。 (自己相対化・自己批判の能力・自己評価・自己批評の能力)	・次につながる課題意識をもつ。

資料1 単元計画 「ことばは生きている」

(1) 目標

○日常の言語活動を振り返り,コミュニケーションのあり方について考え,言語生活を豊かにする。

○動画作成を通して,情報の送り手の立場にたち,情報の活用,発信について学ぶ。

(2) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	話す・聞く能力	言語についての知識・理解・技能
・考えの違いを踏まえて話したり,考えを比べながら聞いたりしながら,協力して学習に取り	・場の状況や相手の様子に応じて,資料や機器などを効果的に活用して話すとともに,自	・言葉に関する知識を活かし,自らの言語生活に役立てようとしている。

組んでいる。	分の見方や考え方を深めている。	
--------	-----------------	--

3) 単元の指導計画 (全7時間)


	学習活動	情報活用	ICT 機器
1	・単元全体の学習の見直しをもつ。・誤用の多い慣用句を提示し、その意味を考える。慣用句とはなにか。慣用句にはどのようなものがあるかを伝え合う。・「国語に関する世論調査」に関する複数の新聞記事を比較読みする。関連情報についても重ね読みをする。	複数の辞書や資料を活用	電子黒板 生徒用・指導者用タブレット端末
2	・文化庁の Web サイトから「ことばに関する世論調査について」の結果データを読み考える。・文化庁の「ことば食堂でようこそ！」を視聴し、誤用の多い慣用句について、正しい意味と成り立ちを理解する。	文化庁「ことば食堂」Web サイトを活用	
3	・グループで話し合い、誤用の多い慣用句をひとつ選ぶ。・誤用について理解する動画作成をするうえで、どのように表現すればよいかを考え構想をもつ。・絵コンテを描く。	文化庁「ことば食堂」Web サイトを活用	
4	・グループで協力、協働しながら、動画作成アプリを用いて、「ことば食堂—昭和中学校バージョン」を作成する。(社会生活の場면을中学校生活にリライトする。)	動画作成アプリを活用する。	
5	・先輩が作成した画像から、どのように構成すれば相手に伝わるかを考え、再構成する。	動画作成アプリを活用	
6	・グループで作成した動画「ことば食堂—昭和中学校バージョン」について相互評価をする。(本時)	動画作成アプリを活用	
7	・言語生活について見直し、よりよいコミュニケーションのあり方について話し合う。		

資料2 本時の学習

目標 ○「慣用句」についての動画の交流を通して、「慣用句」についての理解を深める。

○動画を視聴し、評価の観点に基づき評価をし、よりよい情報発信について考える。

展開

	主な学習活動	ICT 活用のポイント	使用機器 コンテンツ	評価の観点
導入	○本単元のめあてについて確認する。	・本時までの学習活動を電子黒板に提示する。	・電子黒板 生徒用・指導者用タブレット端末	【関心・意欲・態度】 ・考えの違いを踏まえて話したり、考えを比べながら聞いたりしながら、協力して学習に取り組んでいる。
展開	○作成した動画を評価の観点をもとに視聴する。 ○グループで話し合い、コメントを書く。 ・すべてのグループの動画を制限時間内に順に視聴する。 ○一番参考になった作品をグループで話し合い決める。投票する根拠を言葉で表現する。 ○選ばれた動画作品を視聴し、どのようなところがよかったのかを考える。 ○グループでの活動について、振り返る。 ○動画作成を通して、学んだことを伝え合う。	・タブレット端末を各グループで操作し、視聴する。  ・校内 SNS を活用して意見の共有を図る。 ・電子黒板に投影し動画を視聴する。	・動画作成アプリ ・電子黒板 ・生徒用、指導者用タブレット端末 ・校内 SNS	【話す・聞く能力】 ・場の状況や相手の様子に応じて、資料や機器などを効果的に活用して話すとともに、自分の見方や考え方を深めている。 【関心・意欲・態度】 ・考え方の違いを踏まえて話したり、考えを比べながら聞いたりしながら協力して学習に取り組んでいる。 【話す・聞く能力】 ・場の状況や相手の様子に応じて、資料や機器などを効果的に活用して話すとともに、自分の見方や考え方を深めている。
まとめ	○これからのコミュニケーションのあり方について考える。			【言語についての知識・理解・技能】 ・言葉に関する知識を活かし、自らの言語生活に役立てようとしている。